



南海研だより

No. 18

1988年3月

南方海域研究センターの7年

井上晃男（南海研センター長）

昭和55年4月、鹿児島大学の南方地域に関する幅広い学問分野の研究実績をもとに、これを更に一層発展させ、かつ、より総合化、学際化するため、学内施設南方地域総合研究センターが発足した。次いで、これを母体として、今から7年前の昭和56年4月1日、オセアニア及びその周辺地域を調査研究の対象とする、文部省令による学内共同の教育研究施設、鹿児島大学南方海域研究センターが設立された。

初代センター長に中尾佐助教授（現大阪府立大学名誉教授）を迎え、2年目には、教授2、助手1の専任教官と30名の兼務教官の陣容が揃い、フィールドワークを重視した調査研究活動を開始した。その後、この新しい伝統は、第2代センター長岩切成郎教授（現鹿児島大学水産学部長）にひきつがれ、研究活動は更に充実した。また、スタッフもほぼ現在と同じ、教授3、助教授1及び事務官1の専任職員と、100人の兼務教官を数えるにいたった。

設立から今日までの南方海域研究センターの7年をふりかえってみると、まず第一に、鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸を利用した海外学術調査（56年度フィジー；57年度フィジー及びソロモン諸島；58年度パプア・ニューギニア；60年度ポナペおよびトラック島；61年度パラオ諸島及びヤップ島）があげられる。この一連の調査には、弘前大学、筑波大学、群馬大学、宇都宮大学、千葉大学、東京大学、東海大学、京都大学、国立民族学博物館、神戸大学、九州大学、第一工業大学などの学外の教官も含めて、延べ200人の研究者、大学院生が参加した。これらの成果は、調査研究速報（5冊）その他に公

表した。

また、多岐にわたる主題についての、外国人研究者をふくむ演者による研究会（78回）を実施し、シンポジウム（12回）、公開講座（3回）、講演会（4回）などを主催した。研究の成果は南海研紀要（14冊）、南方海域調査研究報告（14冊）、南海研だより（18号）などの印刷物に集約されている。

さて、南方海域研究センターは、この3月で時限が到来し、その役目を終える。幸い、関係各位の御尽力によって、このたび文部省から内示があり、新しく“南太平洋海域研究センター”として生れかわり、再度オセアニアを中心とした地域で学際的な研究をすることになった。残念ながら、昭和73年3月までの10年の時限施設であり、スタッフの増加も全く認められなかったが、何はともあれ新センターの設置が決定したのは、南海研の成果、実績が評価されたことに他ならない。南方海域研究センターの7年間を通じて、学内の兼務教官はもとより、センター協議員を始めとする多くの教官や事務官の方々、さらに学外の諸先生方からも積極的な御支持、御協力を得ることができた。ここに心からお礼申しあげる。なお、現在次期センターの規則が全学の委員会で検討され、その生きざまについても慎重な討議がなされているところであるが、この新しい南太平洋海域研究センターについても、これまで以上の御支援、御鞭撻を賜るようお願いする次第である。

南海研センター小委員会報告

研究小委員長 林 満

$90/(9 \times 8) = 1.25$

今、机上に研究小委員会が関与した研究会の記録が開かれている。表題の左辺分子は、南総研と南海研で開催された講演会などの総回数で、なんとも根気よく積み重ねたものである。しかしクロウと読める。月1回の開催を原則に、特定研究実施中と夏季8月を休みとしたもので、年間ほぼ9回の割りで、8年間やったことを分母が意味する。右辺は、月平均開催回数で、予定数よりやや多かったことを示す。これは外国人研究者の飛入りの13回の講演会に負うところ大であった。

90回の研究会は、通常の講演会の68回、シンポジウム12回、海外調査報告会など7回、公開講座3回に分類される。これらの会の講師の人数は、海外調査報告会の約200名を除外しても、延べ157名にも及ぶ。よくもこれだけの方々に協力いただけたと今更ながら頭が下がる。その内で、講演回数の最も多かったのは、水産学部の岩切教授でなんと7回を数える。また、特記すべきは南太平洋大学のU. RAJ博士でシンポ2回を含め3回もお願いした。

一方、研究会参加者の総数は、はっきりつかめていないが、数千の代であったことは間違いないと思う。その中で、中央公民館を満杯にした中尾・梅棹両氏の講演会や100名を越したシンポなど、仕掛人たちを十分に満足させてくれるものであった。また通常の講演会と例会に最も多く出席されたのは、教養部の浦島教授、農学部の雨宮教授あたりで、両氏とも数万円の例会費を納めていただき、ジュース数十杯とビール数十本をそれぞれ飲んでいただいたと概算している。差額分で仕掛人が十分に楽しませていただいた。紙面をかりてお礼申し上げたい。

3月31日に解散する小委員会も、新生南海研センターでは小がとれて委員会に昇格するらしい。益々の充実・発展を祈念します。

出版小委員長 田川 日出夫

1979年11月に学内措置で発足した南方地域総合研究センター以来、南方海域研究センターが7年の期限をおえるまでに出した出版物は極め

て多数に上り、それらは南海研の教官はもとより、兼務教官や学外の協力研究者等の努力の結晶であると思う。ここにその跡をふり返ってみて、次の研究段階のための礎にしたいと思う。

1. 南海研紀要

南総研紀要第1巻1号を含め、第8巻2号に至る14冊、1640余頁、106篇の論文を掲載した。これらの論文を、南海研の3課題、即ち、①生態、②技術展開、③社会生活構造と保健衛生、に分けてみると、第①課題64篇、第②課題17篇、第③課題25篇となる。また、圧倒的に生物系の論文が多い。これは、南海研の研究活動が、地域研究という色彩が濃いことに原因があろう。

2. 南方海域調査研究報告 (Occasional Papers)

南海研の正式報告である紀要の他に、南方海域調査研究の報告書をグループ毎にまとめて出すもので、多くは文部省の海外学術調査(現海外学術研究)を行った代表者が兼務教官である場合、それらの成果を南海研から出す例、南海研が主催して行ったシンポジウムの報告書として出版する例がある(本号27頁参照)。半分以上は英文で書かれ、国際的に引用されている。

3. 南海研だより

これは南海研の研究活動、出版活動及び、研究者の訪問等の情報についての広報誌である。第1号の出版は1980年8月で、3号までは“南総研だより”になっている。大学を訪問した外国人研究者や管理官などは、殆ど南海研を訪れて、講演しており、海外の情報がふんだんに盛られている。本号をもって区切りとする。

4. 特定研究報告 (Prompt Reports)

南海研が文部省特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」の報告書としてまとめたもので、これは調査に参加したメンバーが編集した。和文で1号、英文で5号出版され(本号28頁参照)、159編の報文を掲載している。

末尾になって恐縮ですが、出版小委員会としては、2回に亘って、兼務教官の南方海域に関する論文、報告書等の目録及び別刷り(1回目は各5部、2回目は各4部)を御提供頂き、南海研活動の存続をかけて文部省と折衝するための資料としました。その甲斐あって、無事発表が決まりましたが、御提供頂いた皆様には厚く御礼を申し上げます。

第 3 回 公 開 講 座 を お え て

寺 田 勇 文 (南海研センター)

南海研センター主催の第3回目の公開講座は、「南世界へのアプローチ：東南アジア・オセアニアの自然と文化」というタイトルで、1987年7月22日から25日までの4日間にわたり行われた。講義科目と講師は以下の通り。

第1日目

「外来と土着——フィリピンの宗教」寺田勇文 (南海研)

「南海のはてに——土地制度と生業」石村満宏 (法文)

「樹皮布の世界」小林孝子 (教育)

第2日目

「熱帯林の砂漠化現象」田川日出夫 (教養)

「クラカタウの昆虫と自然」湯川淳一 (農)

「熱帯果樹とのふれあい」石畑清武 (農)

第3日目

「生活の中の仏教——ビルマ」高谷紀夫 (教養)

「南の世界の魚たち」四宮明彦 (水産)

「南方の諸言語と日本語」崎村弘文 (教養)

第4日目

「太平洋島嶼国の水産開発」松田恵明 (水産)

「東南アジアのエビ」金沢昭夫 (水産)

「南太平洋の食文化」小川春男 (成田東急イン総料理長)

以上敬称略

募集定員約20名のところ、24名の受講者が炎天下のなか毎日午前9時すぎから午後3時まで熱心に出席された。スライドや資料を駆使しての講義、熱帯の果物やめずらしい衣料の数かずを教室に持ちこまれての講義など、主催者側としては頭のさがる思いであった。

今回は、とくにお願ひして成田東急インホテルの総料理長である小川春男氏に鹿児島までお越しいただき、オセアニアの食文化に関する講義の後、時間を延長して実際に調理していただいた。小川氏は、タヒチの超一流ホテルをはじめオセアニア各地で長年料理長としての腕をふるわれた方である。フランス料理のシェフとしての経験もさることながら、オセアニア滞在中

には現地の市場をくまなく歩かれてポリネシア独特の料理法を研究された方でもある。このような経験にもとづいた講義は、オセアニアの食文化を調理する立場から論じるもので、大変興味深かった。調理のデモンストレーションの時間には、サトイモの葉とココナッツミルクをあえたものや、白身魚を酢でしめた料理などがつぎつぎと調理された。鹿児島では良質のココナッツミルクが手に入らないため小川氏が東京から持参され、またサトイモの葉は紫原で有機農法を実践されている方に頼みこんでわけていただいた。料理をのせるバナナの葉は農学部農場から届けていただいた。

例年のことながら、今回も研究小委員会の方गत、会場を提供していただいた理学部、センター事務部の皆様にお世話になった。これらの方々、そして講師の先生方、受講生の皆様に厚く御礼を申しあげたい。

南 太 平 洋 大 学

副 学 長 来 訪

フィジーに本拠を持つ南太平洋地域の国際大学、南太平洋大学の副学長 (日本の学長相当)、G. CASTON氏が昨年8月26日日本学を訪れた。氏は東海大学主催の太平洋学長会議に出席のため来日したのであるが、南太平洋大学と協力協定を結び、緊密な関係にある本研究センターと水産学部との交流を深めるために、わざわざ鹿児島まで足を伸ばしたのである。

当日は水産学部との共催により、水産学部会議室で氏の講演会が開かれ、本研究センター関係者が多数来会した。なお、この講演会は本研究センターの第69回研究会となり、その要旨は本号16~17頁に掲載してある。

研究会の後、東急インで氏を囲んだ夕食会が開かれ、本研究センター長、水産学部長等十数名の氏と関係深い方々が参会した。

オセアニア物語連載にあたって

寺田 勇 文 (南海研センター)

昨年4月から週に2～3回のペースで『南日本新聞』朝刊文化面に「オセアニア物語——鹿大南海研ルポ」という連載を開始した。

南海研は設立以来、特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」を5か年にわたって実施した。その成果は各年度ごとに研究速報として刊行されているが、一般の人びとの目にふれる形でわかりやすくオセアニア世界と人びとの暮らしぶりを伝えることができれば、とういことで始まった企画であった。それ以前に鹿大の自然科学系の研究者が中心となった南日本新聞連載企画『海』があったので、今回は人文社会科学系を中心という考えもあり、新聞社と相談したところ連載をひきうけてくださったわけである。

南海研の企画として進行させるために、まず研究小委員会でご承認いただき、実務責任者として寺田、項目などを決定する世話人として兼務教官の松田恵明氏(水産)、田尻英三氏(教育)、新田栄治氏(教養)にお願いしてスタートした。南海研の紹介もかねて「鹿大南海研ルポ」といったようなサブタイトルを入れることは最初から考えてはいたが、連載を通したメインタイトルをどうするかは最後まで決めかねていた。「オセアニアの社会と文化」というような講演会調のタイトルではいかにもかたすぎるということで、南日本新聞社文化部の担当記者逆瀬川尚文氏とあれやこれやと相談している時に目についたのが、鶴見良行著『マラッカ物語』という本であった。100回の項目のひとつひとつがきちんとつながるものではなくても、全体として現代オセアニアの息吹きを伝える物語となれば、ということで「オセアニア物語」というタイトルに落ちついた。

現在(88年1月末)までにすでに86回分が掲載されており、100回という当初の予定はなんとか達成でき、年度内に完結できることになり、連載実務にたずさわる者としてひといきついているところである。これまでの連載内容を振りかえると、総論に始まり、民族、社会組織、言語、農業、水産業、伝統文化、儀礼、自然生態、

病気、教育、各地のプロフィール、村落生活、経済に関係する項目あたりまでがすでに掲載されており、あとオセアニアの政治や日本とのかかわりをテーマとする項目をもって100回の連載を閉じることになる。

執筆は、特定研究に参加された学内・学外の調査隊員を中心をお願いしたが、研究報告ではなくて現地での体験を書きこんでいただくという方針をとったため、現地調査経験の長い方がたにたくさん項目をお願いすることになったり、また実務担当者(筆者)が不慣れのため適切な項目を選定できなかつたりと、反省すべき点は多々ある。オセアニアを語るなら、これについてはぜひというような項目もずいぶん抜けたままである。地域の面でも、特定研究を実施したフィジーやパプアニューギニア、ミクロネシア連邦とパラオに関するものが多く、ポリネシアの多くの地域やキリバス、ニューカレドニア、バヌアツ、マーシャル諸島などが欠けてしまっている。担当者としては、そうした欠陥が多くあることは承知しているが、南海研としても、さらには全国でも初の試みであったということでご容赦願いたいというのが正直な気持ちでもある。「オセアニア物語」を毎回楽しみにしているという投書が新聞にのったり、知合いの読者が毎回スクラップをつくっているというような話を耳にすると、本当に嬉しい。

連載終了後には、南太平洋海域研究センター編として東京の「めこん」社から単行本として出版されることになっている。オセアニア世界への案内書の役目を果たしてほしいものである。

最後に、執筆者の方がた、南日本新聞社、担当の逆瀬川尚文氏、世話人の皆様、そして実務面での協力をいただいたセンター事務部の神宮司義成氏と久木田彰子氏に深く感謝申しあげます。

出版小委員付記：この「オセアニア物語」は3月7日総計100回をもって完結した。

〔現地調査報告〕

パプア・ニューギニアにおける 成人T細胞白血病の疫学調査

寺 師 慎 一 (南海研センター)

タヒチでの学術調査

井 上 晃 男 (南海研センター)

昭和62年9月17日から10月10までの24日間、文部省海外学術研究経費(がん特別調査)でパプア・ニューギニア(PNG)を訪問した。昨年度と同様に現地住民の血液中の成人T細胞白血病ウイルス関連抗体(ATLA)の検索をおこなった。日本からは鹿児島大学医学部付属病院第二内科の山口幸一先生の協力と、現地ではPNG大学T. TAUFU医学部長ならびに病理学教室のT. TALONU講師による合計4名の共同研究であった。

昨年度は335名の血清を検査し、52例(15.5%)のATLA陽性者が確認され、PNGが同ウイルスの高度流行地域であることが判明した。本年度はそれに引き続き、より多数例についての調査をおこなった。

このウイルスの場合もたとえ感染があっても、ごく一部の人にT-リンパ球由来の白血病または悪性リンパ腫、あるいはATLウイルス起因の瘻性脊髄麻痺(HTLV-I Associated Myelopathy: HAM)をおこすが、この国での報告例はまだ見られない。しかし事実、発病者が無いのか、あるいはそのような疾病が注目されていないための影響かは不明である。

本年度のPNG調査では、総計764例中ATLA陽性者150例(19.6%)、出身地べつに分けると昨年と同様に北部沿岸域や島が20~30%、高地や南部沿岸域は10数%を示す地域が多く、抗体陽性率に差がみられた。この国がこれほど抗体陽性率が高い理由として、PNGは人類移動の時からすでにATLウイルスを持っていた原住民が定住したとの推定がなされている。

このようにPNGでのATLウイルス分布の疫学調査が、世界ATLウイルス分布やPNGの地域特異性を含めて、さらに新たな問題を提起することになってきた。

熱帯や亜熱帯地域でしばしば発生する、魚貝類による食中毒、シガテラについての調査のために始めてタヒチ島を訪れたのは、かれこれ2年以上も昔のことになる。それ以後、この島や周辺の島々で、4回の調査を実施した。最後の調査をして以来5年ぶりに、昨年(1987年)11月から12月にかけて、この島を訪問する機会を得た。

今回は、東北大学安元健教授を代表者とする、文部省海外学術研究「さんご礁海域における魚類の毒化調査」によるものである。総員4人で、そのうちの2人はミクロネシア連邦のポナペ島で、また別の2人はタヒチ島で、それぞれ約3週間にわたって、有毒魚類および藻類の採集、魚貝類中毒の現状の把握、中毒が発生するさんご礁域の環境調査、などを行った。筆者の目的は、シガテラの原因となる単細胞鞭毛藻の分布を知り、現地でのシガテラ発生状況との関係を検討することと、この鞭毛藻を含むできるだけ多くの単細胞藻類を分離培養することであった。

タヒチでは手頃なアパートが少ないことや、滞在期間がそれほど永くないこともあり、首府パペーテのいちばん安いホテルにとまった。共同研究の相手であるバグニス博士が勤務するルイ・マラルデ医学研究所から徒歩15分である。到着したその日から若手研究者やダイバー達と一緒に、仕事を開始した。合計すると2年以上も滞在したことのある研究所ではあるが、実験器具の置き場所が変っていたり、使用を予定していた恒温培養器が故障していたりで、最初の数日間は仕事にならなかったが、その後は順調に調査が進み、当初の目的をほぼ達成することができたのは幸であった。シガテラの原因鞭毛藻や毒魚の分布調査は、現地研究者の手で現在も進行中であり、また筆者自身も今年末に、再度タヒチ島とその周辺の島々での調査を実施する計画である。

〔学 会 報 告〕

英国生態学会シンポジウムに参加して
フィリピン心理学会に出席して

中 野 和 敬 (南海研センター)

寺 田 勇 文 (南海研センター)

昨1987年9月9日より11日までスコットランドのスターリング大学で開かれた「熱帯林並びにサバンナ生態系における鉱物栄養成分」と題するシンポジウムに参加したので、その模様をお伝えしたい。このシンポジウムはイギリス生態学会の熱帯生態学班の主催によるもので、世界中の生態学会のうちの名門が開催したにふさわしく、地元のイギリスは勿論、アメリカ、カナダ、オランダ、西ドイツ、インド等から、現在その方面では第一線の著名な研究者数十名が集まった。なお、日本からの参加者は小生のみだった。余談ながら、参加者のうち、最も多額の旅費を払ったのは小生だったようで、時間的にはともかく、費用の点ではやはりイギリスは遠い国である。

第1日めは大家連の総論があった後、熱帯林やサバンナにおいて微生物及び動物が果たしている機能的役割りについて論議した。

第2日めは二つの分科会に分かれ、焼き畑における栄養鉱物成分の動態と、熱帯天然林におけるその動態に関する論議をそれぞれ行った。

第3日めは事例研究の後、大家候補連によるまとめの発表があり、最後に総合討論で三日間のシンポジウムをしめくくった。

小生は第2日の焼き畑の分科会で「Nutrient dynamics in forest fallows in south-east Asia」と題する論文を読んだが、少々盛りだくさんすぎたため、質疑時間がとれなかった点、大変に残念だったけれども、こっぴどくやっつけられる機会もなかったとも言える。原稿をはじめから用意しておき、思い切り速く読んだのだが、参会者はみなよく理解できたと言っていた。英米人には日本人がいくら速くしゃべったつもりでも、速すぎるとは思わないらしい。

会の雰囲気はなごやかで、ゆとりがあり、日本の学会同様白熱した論戦もあまりなく、イギリス社会を垣間見たような気がした。名前だけは知っていた多くの研究者と面識のできたのが最大の収穫だった。

鹿児島大学援助会の助成により、筆者は1987年10月13日～14日の2日間、フィリピン・ケソン市にある国立フィリピン大学ディリマン校で開催された「フィリピン心理学会第13回大会」に出席し、研究発表を行った。

フィリピンには心理学系の全国学会が5つあるが、今回筆者が出席した学会は、フィリピン語でPambansang Kumperensya sa Sikolohiyang Pilipinoといい、直訳すると「フィリピン心理学のための学会」となる。フィリピンにおける心理学研究・教育は、アメリカによる統治が始まった今世紀初頭以後、長い間英語で行われてきており、大学レベルで使用される教材もほとんどが米国で出版されたテキストであった。しかし1970年代になると、英語ではなく国語であるフィリピン語を使用して同国の社会・文化の特性に適した方法論を確立しようとする動きがあらわれ、それに呼応する形で「フィリピン心理学のための学会」が設立されたわけである。いわば心理学のフィリピン化、土着化をめざす研究者の集まりであり、心理学者だけでなく人類学者、社会学者、歴史学者など幅広い専門分野の研究者が一堂に会する学際的な学会である(フィリピン心理学界の動向については、渡辺文夫「フィリピン心理学」『異文化との出会い(異文化間の心理1)』東京：川島書店、1983年、pp. 86-97に詳しい)。

今回の大会はフィリピン人の精神世界を共通テーマとして、出席者は150名、20編をこえる研究発表とシンポジウムが行われ盛会であった。筆者は、大会2日目午前の第1セッションで、“Ilang Tala ukol sa mga Kulito ng Espiritu ng Santo Niño”(サント・ニーニョ精霊カルトに関する考察)と題する発表をタガログ語で行った。これは、フィリピンに定着したシンクレティズムの事例として最近の宗教現象をとりあげたものだが、質疑応答の際に多数の研究者からコメントを得る事ができた。

昭和61年度「オセアニア海域における水陸総合学術調査」(パラオ, ヤップ) 研究報告会開催される

昭和61年度特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」(第5次, パラオ及びヤップ)の研究報告会は昨62年4月27日理学部生物学科の教室で開かれた。まず, 井形学長のあいさつに始まり, 第1, 第2, 第4, 第5, 第3課題の順に計21題の報告があった。そのプログラムは本号23~24頁に掲載してある。参会者が主に第5次調査隊員だったのは当然としても, 初代センター長中尾佐助氏他遠来の方を含めて以前に同様の調査隊に参加したことのある方も何名か熱心に耳を傾けた。

報告会は終始なごやかな雰囲気の中で進められたが, 10分間ずつの発表後の質疑では, 同じ船で何十日も過ごした間柄から生まれた気安さもあって遠慮のない活発な論議がしばしば展開された。

最後に寺師慎一(南海研センター)第5次調査隊長がまとめのあいさつをし, 盛会裡にこの会をしめくくった。

なお, この昭和61年度特定研究の成果速報の出版に関しては本号26頁を見られたい。

研究報告会終了後, 夕刻よりホテル・サンローヤルで5回にわたる「オセアニア海域における水陸総合学術調査」の記念パーティーが開かれ, 中尾初代センター長, 岩切前センター長始め, 蟹江元学長, 石神前学長, 一度でもこの調査に参加したことのある隊員, 本センター協議会委員等百名近くが参会した。

そしてまず, この調査の実施に力を尽くした方々のあいさつがあった。その後立食方式による懇談に入ったが, その間に本学農学部林満氏, 京都大学の鱒坂哲朗氏, 本研究センターの中野和敬氏の3氏が5回とも調査隊に参加したことで特に紹介された。そのようにして和気あいあいのうちに, 本研究センターにとって記念すべき一夕を過ごした。

昭和62年度
南方海域研究センター
協議会委員名簿

任期は全員昭和63年3月31日まで

区 分	部 局 等	氏 名
委 員 長	センター長	井 上 晃 男
セ ン タ ー 専 任 教 官	センター	中 野 和 敬
	〃	寺 師 慎 一
	〃	寺 田 勇 文
セ ン タ ー 兼 務 教 官	理 学 部	早 坂 祥 三
	医 学 部	佐 藤 淳 夫
	農 学 部	雨 宮 淳 三
	農 学 部	片 山 忠 夫
	水産学部	平 田 八 郎
	教 養 部	浦 島 幸 世
各学部および 教養部選出 委 員	法文学部	水 野 一 郎
	教育学部	松 尾 善 弘
	理 学 部	厚 見 寅 司
	医 学 部	脇 阪 一 郎
	歯 学 部	小 片 丘 彦
	工 学 部	松 井 宏 方
	農 学 部	品 川 昭 夫
	水産学部	市 川 英 雄
教 養 部	末 永 政 治	

(敬称略)

『南海研だより』 11号～18号 総目次

10号までの総目次は10号に掲載済み。

巻頭言	号数
新任ご挨拶	〔井上 晃男〕 13
所感	〔井上 晃男〕 14
南海研センターのこの一年	〔井上 晃男〕 15
南海研センター昨年	〔井上 晃男〕 16
南方海域研究センターの7年	〔井上 晃男〕 18
研究活動	
センター研究会・活動報告(1983年9月～1984年2月)	11
第三次「オセアニア海域における水陸総合学術調査」講演会について	〔井上 晃男〕 12
第24回研究会(パプア・ニューギニア調査報告会)報告	〔中野 和敬〕 12
センター研究会・活動報告(1984年3月～6月)	12
寺田勇文助手の内地留学	12
センター研究会・活動報告(1984年7月～12月)	13
中野和敬教授のインドネシア出張	13
寺田勇文助教授のフィリピン出張	14
公開講座「南太平洋」のお知らせ	14
パプア・ニューギニア工科大学よりの留学生	14
センター研究会・活動報告(1985年1月～6月)	14
研究報告会のご案内	15
南海研センター第1回公開講座〈南太平洋〉をおえて	15
センター研究会・活動報告(1985年7月～1986年1月)	15
第2回公開講座「多島海世界のなりたち—東南アジア・オセアニアの 自然と文化—」	〔林 満〕 16
昭和60年度「オセアニア海域における水陸総合学術調査」 (ミクロネシア連邦)研究報告会開催される	16
第四次「オセアニア海域における水陸総合学術調査」報告会	16
中野和敬教授のインドネシア出張	16
寺田勇文助教授のフィリピン出張	16
寺師慎一教授のパプア・ニューギニア出張	16
センター研究会・活動報告(1986年2月～8月)	16
センター研究会・活動報告(1986年9月～1987年2月)	17
南海研センター研究小委員会報告	〔林 満〕 18
第3回公開講座をおえて	〔寺田 勇文〕 18
南海研センター専任教官の海外出張及び研修記録一覧表(1987年3月～1988年3月)	18
センター研究会・活動報告(1987年3月～1988年3月)	18

出版活動

号数

南海研センターの出版物（1984年1月～6月）	12
南海研センターの出版物（1984年7月～12月）	13
南海研センターの出版物（1985年1月～6月）	14
南海研センターの出版物（1985年7月～1986年1月）	15
南海研センターの出版物（1986年2月～8月）	16
「南海研紀要」投稿規定実施へ	16
南海研センターの出版物（1986年9月～1987年2月）	17
南海研センター出版小委員会報告	〔田川日出夫〕 18
オセアニア物語連載にあたって	〔寺田 勇文〕 18
南海研センターの出版物（1987年3月～1988年3月）	18
Occasional Papers（南方海域調査研究報告）一覧	18

運 営

南方海域研究センター 旧電子計算機室へ移転	12
南海研センター 兼務教官異動	12
寺田勇文助手の助教授昇任	12
協議会委員の交代	12
センター新任者紹介	16
協議会委員の交代	16
協議会委員の交代	17

各種委員会名簿

南方海域研究センター協議会委員名簿	14
南方海域研究センター各小委員会委員名簿	14
南方海域研究センター昭和61年度特定研究委員会名簿	15
昭和62年度南方海域研究センター協議会委員名簿	18

特定研究

大きい知見の集積：国際交流への進展を期待	〔岩切 成郎〕 11
パプア・ニューギニア学術調査の特色	
—昭和58年度文部省特定研究を終えて—	〔平田 八郎〕 11
特定研究委員会の発足から調査隊の派遣まで	〔井上 晃男〕 11
パプア・ニューギニアでの調査—調査許可取得まで—	〔井上 晃男〕 11
かごしま丸医務室診療ノート	〔寺師 慎一〕 11
第1課題・Rural Areaの土地利用と陸上生態系の保全	〔林 満〕 11
第2課題・熱帯水域の物質生産と資源の有効利用	〔米盛 亨〕 11
第3課題・地域住民の遺伝と保健衛生	〔木原 大〕 11
第4課題・Rural Areaの社会および生活構造	〔片岡千賀之〕 11
昭和58年度特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」	
（パプア・ニューギニア）調査隊名簿	11
第II期・第1次「オセアニア海域における水陸総合学術調査」をおえて	〔早坂 祥三〕 15

ポナペ島, トラック諸島調査に至るまで……………	〔寺師 慎一〕 15
第1課題: ミクロネシアの土地利用と陸上生態系の保全	
—土地利用の過去・現在・未来学—……………	〔林 満〕 15
第2課題: 熱帯水域の物質生産と資源の有効利用—さんご礁の海と水産班……	〔米盛 亨〕 15
第3課題: 地域住民の遺伝と保健衛生—健康であることのありがたさ—……………	〔松元 正〕 15
第4課題: ミクロネシアの社会及び生活構造……………	〔松田 恵明〕 15
はだで知り得た南海と浮かぶ島々……………	15
南洋の泥にまみれて……………	〔松川 進〕 15
オセアニア海域の学術調査に初めて参加して……………	〔八田 明夫〕 15
ミクロネシア調査行の思い出……………	〔波多野浩道〕 15
トラックでのカツオ1本釣り漁船乗船記……………	〔石井 寿和〕 15
昭和60年度特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」	
(ポナペ島及びトラック諸島) 調査隊名簿……………	15
昭和61年度特定研究	
「オセアニア海域における水陸総合学術調査」(II-2) について……………	16
第II期・第2次「オセアニア海域における水陸総合学術調査」をおえて……………	17
パラオ諸島, ヤップ諸島調査に至るまで……………	〔寺田 勇文〕 17
第1課題: ミクロネシアの土地利用と陸上生態系の保全	
—土地利用の空洞化とそれへの抵抗—……………	〔中野 和敬〕 17
第2課題: 熱帯水域の物質生産と資源の有効利用	
—パラオ, ヤップの自然を調査して—……………	〔八田 明夫〕 17
第3課題: 地域住民の遺伝と保健衛生—パラオで当分開業できる—……………	〔寺師 慎一〕 17
第4課題: ミクロネシアの社会及び生活構造—伝統社会の変容—……………	〔寺田 勇文〕 17
第5課題: 南太平洋の海洋構造とその変動—海と空と地磁気の調査—……………	〔茶園 正明〕 17
初めて体験した北回帰線のかなた……………	17
昭和61年度特定研究に参加して……………	〔鈴木 広志〕 17
ピンロウ……………	〔峰 和治〕 17
南太平洋船旅日記……………	〔平川 忠敏〕 17
かごしま丸医務室診療ノートから……………	〔寺師 慎一〕 17
昭和61年度特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」	
(パラオ諸島およびヤップ諸島) 調査隊名簿……………	17
昭和61年度「オセアニア海域における水陸総合学術調査」	
(パラオ, ヤップ) 研究報告会開催される……………	18
The Prompt Reports of the Scientific Survey	
of the South Pacific (特定研究成果速報) 一覧……………	18

研究会発表要旨

クラカタウ諸島の地理生態学(第21回)……………	〔湯川 淳一, 山根 正気〕 11
フィジーの魚貝毒調査……………	〔井上 晃男〕 11

シンポジウム「熱帯域の有毒魚介類」	12
熱帯域の有毒魚介類	[安元 健] 12
シガテラに関連する鞭毛藻と毒の性状	[安元 健] 12
熱帯域の有毒鞭毛藻の分類	[福代 康夫] 12
シガテラ毒化原因鞭毛藻の分布と生育環境	[井上 晃男] 12
熱帯域のまひ性貝毒原因鞭毛藻と毒の性状	[大島 泰克] 12
熱帯域のカニおよび巻貝類の毒化原因と毒の性状	[小瀧 裕一] 12
Ciguatera Outbreaks Induced by Disturbances on Coral Reef Ecosystems	[Raymond BAGNIS] 12
Ciguatera, Clupeotoxism and Other Seafood Poisoning in Fijian Waters and Their Impact to the Utilization of Marine Resources	[Uday RAJ] 12
南太平洋諸国のカツオ漁業 (第22回)	[片岡千賀之] 12
シンポジウム「熱帯と肝臓病」 (第23回)	12
ソテツ種子含有配糖体(Cycasin)による実験的肝癌	[小林 昭, 寺師 慎一] 12
ウイルス性肝炎の疫学, 臨床, 病理	[志方 俊夫] 12
熱帯地における主な出血熱, 原虫感染症, 中毒性疾患の肝臓病変	[板倉 英世] 12
日本語とインドネシア語の対照研究 (第25回)	[田尻 英三] 12
昔の焼酎造りの伝播の中での薩摩の位置 (第26回)	[蟹江 松雄] 13
南西諸島の母子関係 (第27回)	[寺脇 保] 13
鹿児島県の民家一二棟造について一 (第28回)	[伊藤 行] 13
南方海域における日本のかつお・まぐろ漁業の戦略と制限要因 (第29回)	[松田 恵明] 13
ニューカレドニアの生物相 (第30回)	[L. O. BRUN] 13
ネパールでの調査の概要 (第31回)	[鈴木 英治] 14
シンポジウム「藻類」 (第32回)	14
最近の藍藻類の分類の研究	[梅崎 勇] 14
紅藻類の雌性生殖器の構造	[糸野 洋] 14
褐藻類の生活史 特にナガマツモ目について	[鯨坂 哲朗] 14
緑藻類の生活史, 特に多核細胞性海産緑藻の生殖, 体形成, 生活史について	[榎本 幸人] 14
タンザニアの経済開発 (第33回)	[R. H. LUKINDO] 14
オセアニア漁業の動向 (第34回)	[岩切 成郎] 14
自然環境におけるヒ素の化学形態と水生生物によるヒ素の代謝 (第35回)	[前田 滋] 14
穀類における貯蔵澱粉のウルチ-モチ性とその地理的分布 (第36回)	[坂本 寧男] 14
シンポジウム「南方地域有用農作物遺伝子源の分布と探索」 (第37回)	14
マメ類: その過去・現在・未来	[前田 和美] 14
果樹遺伝資源の探索と分布	[秋濱 友也] 14
イネ属植物の分布限定と探索阻害要因	[片山 忠夫] 14

金属鉱床をともなう火成活動 (第38回)	〔根建 心具〕 14
成人 T 細胞白血病 (ATL) (第39回)	〔松元 正〕 14
米国セント・ヘレンズ火山の大噴火後の亜高山植生の回復 (第40回)	〔R. DEL MORAL〕 14
東南アジアおよび大陸との関連からみた日本の新生代脊椎動物化石相について (第41回)	〔大塚 裕之〕 15
多民族社会の位相—ビルマ近況報告— (第42回)	〔高谷 紀夫〕 15
外洋に出現する仔稚魚 (第43回)	〔小沢 貴和〕 15
腔腸動物の生活史, および形態形成にかかわる環境条件 (第44回)	〔柿沼 好子〕 15
シンポジウム「南方漁業の未来像」(第45回)	15
カツオ漁業の現状と問題点	〔肥後 道隆〕 15
南方海域におけるマグロ資源	〔鈴木 治郎〕 15
カツオ・マグロ資源の国際管理	〔米盛 保〕 15
国連海洋法成立の経緯とその意義	〔高林 秀雄〕 15
南方漁業における国際協力	〔松田 恵明〕 15
島嶼漁業の現状と問題点	〔岩切 成郎〕 15
マダガスカル島の稲作について (第46回)	〔中釜 明紀〕 16
フィリピン水産学校の将来に寄せて (第47回)	〔野呂 忠秀〕 16
熱帯におけるカリバチ類の社会生活 (第48回)	〔山根 正気〕 16
魚類および甲殻類の脂質栄養の特異性 (第50回)	〔手島 新一〕 16
ワムシ類 (動物プランクトン) の大量培養と貯蔵方法 ならびに淡水魚への活用性について (第51回)	〔E. LUBZENS〕 16
福建省沿海地域の産業概況 (第52回)	〔岩切 成郎〕 16
シンポジウム「古地熱系と活地熱系」(第53回)	16
南西諸島周辺の古地熱	〔木村 政昭〕 16
南方地域の地熱と日本の関係技術	〔中川 進〕 16
ニュージーランドの地熱系	〔J. W. HEDENQUIST, 田口 幸洋〕 16
南方島弧の古地熱系	〔井沢 英二, 浦島 幸世〕 16
琉球方言と周辺諸語—アクセントを中心に— (第54回)	〔崎村 弘文〕 16
インドネシア-日本の科学研究協力 (第55回)	〔H. NAPITUPULU〕 17
北部タイにおける焼畑と土地利用政策 (第56回)	〔C. L. J. VAN DER MEER〕 17
南太平洋の水産資源—島嶼の人々への将来の寄与— (第57回)	〔U. RAJ〕 17
Current Concepts of Thrombocyte Function (第58回)	〔K. J. R. ABAIDOO〕 17
オーストラリアと中国の柑橘 (第59回)	〔岩堀 修一〕 17
タイ国中・北部地域の古・中生界の地質調査と有孔虫の話 (第60回)	〔八田 明夫〕 17
パプア・ニューギニアにおける科学研究事情 (第61回)	〔A. J. STRATHERN〕 17
シンポジウム「腔腸動物」(第62回)	17
イシサンゴ類の生殖	〔山里 清〕 17

号数

共生種における器官分化と形態形成	〔柿沼 好子, 塚原 潤三〕	17
造礁サンゴの生育形の可変性と種間競争	〔西平 守孝〕	17
腔腸動物系統分類学の現状	〔山田 真弓〕	17
インドネシアの日本語教育事情 (第63回)	〔鮎沢 孝子〕	17
火山と人間: The Relationship between Volcanoes, Geothermal Systems and Gold Deposits (第64回)	〔J. W. HEDENQUIST〕	17
骨からみた日本人の成り立ち		
—九州中世時代人を中心にして— (第65回)	〔佐熊 正史〕	18
アスコルビン酸 (ビタミンC) と血圧について (第67回)	〔吉岡 満城〕	18
ベトナム考古学の現状 (第68回)	〔新田 栄治〕	18
USP の現状と未来 (第69回)	〔G. CASTON〕	18
日本・東南アジア関係史再考のための一考察—フィリピン・ベンゲット 道路工事 (1900—1905) を事例として— (第70回)	〔早瀬 晋三〕	18
シンポジウム「熱帯地域の動物媒介寄生虫病 —日本と発展途上国とのかかわり—」 (第71回)		18
住血吸虫病—水と貝と人間と	〔野島 尚武〕	18
マラリア—熱帯病実地対策と基礎研究との連携	〔鈴木 守〕	18
オンコセルカ症-ロブレス症・奴隷貿易が運んだ疾病	〔多田 功〕	18
総括—駆除対策の行方と日本の貢献	〔田中 寛〕	18
スマトラ高地湖集水域の自然保全 (第72回)	〔中野 和敬〕	18
フィリピンの宗教について (第73回)	〔M. A. FORONDA〕	18
東カリマンタン州の熱帯多雨林の大火災について (第74回)	〔N. WIRAWAN〕	18
オセアニアで流行する感染症 (第75回)	〔寺師 慎一〕	18
シンポジウム「フィリピンの宗教と社会」 (第76回)		18
フィリピン=カトリック社会の歴史的形成をめぐって	〔池端 雪浦〕	18
聖地バナハオ巡礼をめぐって	〔寺田 勇文〕	18
〈二月革命〉の基層: カトリシズムの視点から	〔清水 展〕	18
マニラ首都圏のイスラム教徒	〔宮本 勝〕	18
フィリピンの地質と鉱物資源 (第77回)	〔E. G. DOMINGO〕	18
南太平洋のシガテラ (第78回)	〔井上 晃男〕	18

現地調査及び学会報告

イギリス生態学会研究会に出席して	〔中野 和敬〕	12
フィジーにおける <i>Nautilus pompilius</i> (オウムガイ) の生態調査		
—1983年度文部省科学研究費海外学術調査—	〔早坂 祥三〕	12
「大阪大学南太平洋 Colloquium 1984」に出席して	〔寺師 慎一〕	12
琉球弧南端海域の総合調査	〔武石 泰亮〕	13
第26回日本熱帯医学会総会 (於鹿児島) から	〔寺師 慎一〕	13
フィリピン・フォーク・カトリシズムの歴史人類学的研究	〔寺田 勇文〕	16

スマトラ山地の自然保全……………	〔中野 和敬〕 16
パプア・ニューギニアにおける成人 T 細胞白血病の疫学調査……………	〔寺師 慎一〕 18
タヒチでの学術調査……………	〔井上 晃男〕 18
英国生態学会シンポジウムに参加して……………	〔中野 和敬〕 18
フィリピン心理学会に出席して……………	〔寺田 勇文〕 18

そ の 他

岩切成郎南海研センター長が MBC 賞を受賞……………	11
TSENG教授のセンター来所……………	13
ビデオテープの紹介……………	13
南海研出版物の題字について（回答）……………	13
南方海域研究センターの建物の改装工事……………	14
パプア・ニューギニア大学副学長センター来訪……………	14
フィジーとパプア・ニューギニアよりの来訪者……………	16
外国人来訪者記録（1986年2月～8月）……………	16
外国人来訪者記録（1986年9月～1987年2月）……………	17
南太平洋大学副学長来訪……………	18
外国人来訪者記録（1987年3月～1988年3月）……………	18

総目次

『南海研だより』11号～18号……………	18
----------------------	----

南海研センター専任教官の 海外出張及び研修記録一覧表 (1987年3月～1988年3月)

氏 名	在 外 期 間	目 的 国	用 件
寺田勇文（助教授）	4月3日～4月9日	フィリピン	共同研究打ち合わせ
中野和敬（教授）	9月5日～9月27日	イギリス, オランダ	学会出席及び共同研究打ち合わせ
寺師慎一（教授）	9月18日～10月9日	パプア・ニューギニア	学術調査
寺田勇文（助教授）	10月9日～10月16日	フィリピン	学会出席
井上晃男（教授）	11月18日～12月9日	仏領ポリネシア	学術調査
寺田勇文（助教授）	1月12日～1月22日	フィリピン	学術調査

〔第65回研究会発表要旨〕

骨からみた日本人の成り立ち

—九州中世人骨を中心にして—

佐熊 正史 (齒)

永い時間を経て人類は形態的にさまざまな変化を遂げてきたが、こうした変化はアウストラロピテクスからホモ・サピエンスへと進化する過程においては勿論、ここ数千、数百あるいは数十年間にも起こっている。分類学でいう種を超えた変化を大進化とよんでいるが、同じ種の中での比較的短かい期間内に起こる変化を小進化とよんでいる。日本人についても例外ではなく、この小進化が認められる。

今回は、私が手がけた九州地方から発掘された中世(鎌倉・室町)人骨を中心にして、その人骨のもつ時代性、地域性を明らかにするとともに、縄文時代から現代に至る日本人骨格の時代的变化の中でそれが、どのように位置づけられるかについて概説した。

九州中世人は、強い長頭、低顔、歯槽性突顎を特徴とする。これを縄文時代から現代までの時間軸の中で捉えると、古墳人にすでにこれら諸特徴の萌芽が見られ、中世でクライマックスを迎えるが、現代人に至ると逆に著明な短頭化、高狭顔化、非歯槽性突顎化が認められるようになる。

現在の所、我が国である程度まとまった中世人に関する報告は、鎌倉材木座中世人と、山口県吉母浜中世人、さらに九州中世人の3つである。これら中世人は、いずれも上記の中世人的特徴をそなえ、現代人とは明らかな差が見られるので、地方差を超えた時代性があると認めてよいであろう。ただし3者のうち、九州人は鎌倉人と酷似しているが、やや高顔の傾向を示す吉母浜人とは多少異なっている。

近年、日本人の起源に関して金関の論じた渡來說が有力視されているが、その根拠となった資料は高顔、高身長を特徴とする北部九州・山口地方の弥生人である。一方、内藤は、低顔、低身長を特徴とする西北九州地方の弥生人は縄文人の継続であると結論づけている。以上のような考え方に立つならば、熊本・大分県を中心に得られた九州中世人は、縄文人から連綿と続

いた土着型に属し、渡来者の影響を受けることが少なかったものと推測される。

また吉母浜人の高顔性は、北部九州・山口地方の弥生人に見られる高顔性の影響が残っているためと考えることもできる。しかし、この問題は北部九州・山口地方において各時代の資料が整備された後、改めて検討されるべきであろう。

〔第67回研究会発表要旨〕

アスコルビン酸(ビタミンC)と血圧について

吉岡 満城 (医)

アスコルビン酸(以下 As. A)は脂質代謝を正常化することから、とくにアテローム性動脈硬化の予防に重要な因子であると知られています。しかし日本人に多発する脳卒中は直径3 mm以下、主として100~200 μ m 細動脈の硬化に起因し、高血圧が重要なリスクファクターとなっております。

As. Aの生理作用は今日でも不明な点が多く健康の維持増進といった面から多くの議論がなされています。私共の鹿児島県在住者を対象とした疫学的研究および自然発高血圧ラット(SHR)を用いた実験的研究で得られた研究結果の大概を次に示します。

(1) 男性および女性の血清中 As. A濃度はそれぞれ 7.4 ± 2.4 (SD) μ g/ml, 9.6 ± 2.4 (SD) μ g/ml ではほぼ正規分布を示す。As. Aの血中濃度から As. A摂取量を推定すると男性約50 mg/日、女性80 mg/日で、国民栄養調査の値(120 mg/日)よりかなり下回っている。As. A欠乏と見做される3 μ g/ml以下の割合は、男性9.3%、女性1.8%であった。

(2) 男性、女性の両者について、血清 As. A濃度の平均値 \pm 1標準偏差の値を用いてそれぞれ3グループに分け、高血圧者(WHOの基準)の頻度を比較すると、血清 As. A高濃度グループ(男性10 μ g/ml, 女性12 μ g/ml以上)では他のグループより有意に高血圧者が少い。また、30歳代の健常男性について、動脈硬化をきたすリスクファクター(高血圧、肥満、血中コレステロール等)と血中 As. Aとの関連性を詳細に検討すると As. Aは血圧と最も強い関連性を示

し、負の相関であった。

(3) SHR や脳卒中易発ラット (SHR-sp) での実験的研究では、As. A は血圧上昇および脳卒中発症を抑制することが示された。

以上私共の研究結果および従来報告されている研究結果を合せて考察しますと、As. A は血圧と密接な関連性を有し、As. A 摂取量の多い地域では脳卒中が少ないという疫学報告を支持するものであった。また高血圧有症率という観点から、少なくとも血清 As. A 濃度を10 $\mu\text{g}/\text{ml}$ 以上 (As. A 摂取量 1日100 mg) に維持することが加齢に伴う血圧上昇の抑制、ひいては動脈硬化防止に重要であると推定された。

〔第68回研究会発表要旨〕

ベトナム考古学の現状

新田 栄治 (教養)

1987年2月、ベトナム社会科学委員会の招聘により、ベトナム考古学の研究のため、ベトナム北部を訪問した。この訪問には、(財)高梨学術奨励基金より御援助を得た。

2週間の短期間の訪問であったが、ベトナム考古学の現状を知るまたとない機会であった。ベトナム考古学研究機関としては、社会科学委員会のなかに考古学研究所があるほか、ベトナム歴史博物館、ハノイ大学がある。各省には、文化局があり、文化財に関する業務を行っている。

ベトナム考古学において現在最も主要なテーマとなっているのは、金属器文化の自律発展の過程を解明することである。フングエン文化からドンソン文化に至る発展過程が考古学的に追求されており、大きな成果をあげている。金属器文化の研究において、ベトナムの民族象徴ともいえるドンソン文化に対する研究は特に顕著で、その代表的遺物の銅鼓研究は、現在のベトナム考古学界の熱狂的研究主題である。また、稲作の起源に関するテーマも同様で、先年発掘されたソムチャイ洞穴の炭化米の年代が大きな問題となっており、ベトナムでの稲作の起源と稲品種の変遷について活発な議論がある。また、ベトナム中・南部での調査の進展に伴い、中部海岸地方のサフィン文化、南部のドンナイ文化

などの存在が確認され、新たな展開を示している。

考古学はベトナムの民族的誇りを鼓舞する政治的な役割も与えられており、政策的に優遇されているようである。発掘には日本と同じく、学術調査と工事に伴って実施される緊急調査とがあり、これも日本と同様に、後者の割合が大きいようである。

〔第69回研究会発表要旨〕

USPの現状と未来

G. CASTON (南太平洋大)

It is the only university which is controlled, owned and funded by 11 different countries, and each with different languages, cultures, and governments. The funding is as if it is their own national university, because none of the countries can afford to have its own.

Of course this causes problems in the control and funding, for example, Samoa has the School of Agriculture, and the Solomon Islands wants the Marine Research Institute on their land, and at this time neither appear to be financially prudent. The countries on the Pacific rim are all interested in us, and if we accepted all student exchange invitations we would have no students left, and this is why the university was formed.

Before the university was founded, the students had to study in the Pacific rim countries and very often they didn't come back. The University of the South Pacific was founded partly in order to make a world class university based on our own cultures and form an intellectual tradition of our own. We also took some of the cultural, intellectual and research traditions and methods of the countries around the rim, but intentionally not from any one country.

Unfortunately we are not able to draw as much from Japan as we'd like to because

of the language barrier. It's much easier to get faculty members from English speaking countries.

Now lets turn to the demography of these 11 countries. The total population is 1.5 million, with 50 % in Fiji and 20 % in the Solomon Islands, and the remaining 30 % in the 9 remaining countries. There are about 1850 full time students in the main campus in Fiji, and about 150 in the School of Agriculture in Samoa, plus 10,000 part time students throughout the area. We think we have one of the pioneering distance-education systems in the world, using mail, video, and telecommunication systems. This is about 30 % of our educational system. About 70% of the students are from Fiji because it has the most advanced educational system and, it contributes 70% of the budget. The numbers of the rest of the students are in proportion to the population of the countries.

The annual budget is ¥1.2 billion per year. And we are always in financial difficulty. In the past 3 years, the student body has increased by 25 % while we were lucky to keep the budget stationary. This contributes to our greatest problem, the teacher to student ratio is getting smaller and smaller, which puts a strain on the staff. Sixty percent of the 250 teachers are citizens of the 11 countries, and the rest are from 30 other countries. This makes it unique in the world.

We do only degree level work. We don't offer sub-university level nor advanced specialized courses; no engineering, medicine, law, nor architecture. We offer agriculture, the basic sciences, the social sciences, literature, education, and languages (only Pacific vernacular and English). We do research applicable to Pacific Societies. We also offer refresher and continuing adult education courses.

文責：中野和敬（南海研センター）

〔第70回研究会発表要旨〕

日本・東南アジア関係史 再考のための一考察

—フィリピン・ベンゲット道路工事

(1900—1905年)を事例として—

早瀬 晋三(教養)

日比関係史に関わり始めてまず感じたことは、何故、従来の記述は、日本側の資料だけにに基づき、日本人しか登場しないのだろうかということだった。しかも、国策としての「南進論」が盛んだった頃の宣伝、誇張、歪曲された歴史像をそのまま戦後に踏襲して、あたかも史実であるかのように現代にまで伝えている。例えば、ベンゲット移民について、最も信頼されてきた文献は、「南進論」盛んなりし頃書かれたもので、その内容を再検討することは、未刊行の外務省外交史料館文書をみるまでもなく、刊行された『日本外交文書』を通読するだけで充分である。そこには、「日本人によって完成したベンゲット道路」の記述も、「日本人700人の人柱」の記録もなく、日本人労働者の評判があまり芳しくなかったことさえ書かれている。まして、アメリカやフィリピンの記録に日本人の功績を讃えたものはない。もともと日本政府があまり乗り気ではなかったベンゲット移民の話は、昭和10年代に入って、「南進」ムードの高まりと共に、人々の注意を南に向けるために、米中比人では、成し遂げられなかった難工事を日本人の血と汗で完成した美談として登場してくるのである。即ち、日本人の優秀性を示す格好の題材として誇張され、利用されたのである。そして、このことは、多かれ少なかれ他の東南アジアと日本との関係史にもあてはまる問題ではないかと考えられる。近年、日本・東南アジア関係史をめぐる研究は少なくない。しかし、中には、戦前・戦中の記述を再検討することなく、日本側の資料のみに固執した記述も見られる。外国文献を利用したとしても、補足的に使っているにすぎず、現地側の歴史を踏まえず書かれた日本・東南アジアの関係史は、「侵略者」の歴史に留まるのではないだろうか。それを越える意味においても、まず、現地側の歴史のコンテクストの中で、日本と東南アジアの関係史を問い直さなければならないだろう。

〔第71回研究会発表要旨〕

シンポジウム「熱帯地域の動物媒介性寄生虫病

—日本と発展途上国とのかかわり—

企画責任 佐藤 淳夫 (医)

1987年10月13日

1) 住血吸虫病

—水と貝と人間と

野島 尚武 (鹿大医学部)

先進国では寄生虫疾患が急減している。われわれ人間の生活環境の変化が寄生虫の自然維持さえ困難にしたからである。とくに経口感染する疾患は壊滅状態である。寄生虫には、安全な寄生生活の外に他の宿主伝播する時、人によってもたらされた環境での試練が待ちうけている。人が衛生的にして感染を防ごうとした結果である。一方、今でも動物の寄生虫疾患は、人の管理下にはない時にはハイレベルで維持されている。住血吸虫種には3種あり、日本には日本住血吸虫症が過去に悲惨な歴史を残している。熱帯地域には未だにマンソン住血吸虫症、ビルハルツ住血吸虫症も蔓延し、多くの国民を早死させるという人的経済問題となっている。人も、寄生虫も、媒介する貝類も、動物として水を求めて厳しい自然環境下に生きている。

2) マラリア—熱帯病実地対策
と基礎研究との連携

鈴木 守 (群馬大医学部)

熱帯病の対策が実際に必要とされる国のほとんどが、いわゆる発展途上国であり、高度なライフサイクルに関する研究活動は通例期待できない。実地対策はしたがってプライマリー・ヘルス・ケアを中軸とした、地域住民による保健衛生活動のキャンペーンを展開させることによってすすめられる。わが国の研究者が研究室レベルで追求している研究活動は、現場の対策活動とは異質の世界にあるように思われる。熱帯地での実地対策に、国内での研究活動をいかに包含させていくかにつき、演者が現在までにマラ

リア対策を中心におこなった試みを総合的にまとめた。各位の批判を仰ぎたい。

3) オンコセルカ症-ロブレス症・

奴隷貿易が運んだ疾病

多田 功 (熊大医学部)

回旋糸状虫と呼ばれるフィラリアが、中央アメリカにも分布していることを最初に発見したのがロブレス博士である(1915年)。本虫は皮膚病変を起こすが、もっとも重大なことは眼に侵入して失明をひき起こす点である。世界中に1,800万人以上の患者が存在し(WHO, 1986)、その中心は西アフリカである。従来から本虫は中米土着種なのか、あるいは西アフリカから移入された種なのかについて数多くの論争がなされた。われわれの研究グループは1982年以来、この問題解明に取り組んだ。16~18世紀にアフリカから約1,000万人の奴隷が中南米に運ばれたが、われわれの研究結果によれば、本病はこの中に含まれた感染者が新大陸に持ち込んだらしい。

4) 総括—駆除対策の行方と

日本の貢献

田中 寛 (東大医科学研)

熱帯地域の寄生虫疾患の駆除対策の基本はずでに完成していたかにみえ、世界は熱帯諸国への技術導入で対処できると考えていた。しかし、熱帯諸国における人材、実施能力、経済力の不足から、この方法に頼れないことが明らかとなった。そこで国連は、熱帯医学特別計画を設立し、治療剤、診断法、ワクチンの開発などを、生物技術の大幅な導入によって計画し、次第にその成果をあげてきた。また成果の評価のために疫学および生態学の普及も計ってきた。こういった情勢のなかで、わが国の世界への貢献は、(1)

国内の実験室での基礎研究や、診断、治療、ワクチン、予防法の開発、(2)途上国の必要とする能力を持った人材の育成が大切となる。

〔第72回研究会発表要旨〕

スマトラ高地湖集水域の自然保全

中野 和敬 (南海研センター)

ほぼ南緯1度に位置し、スマトラを東西に分ける分水界に接しているディアタス、ディバルー、タランという三つの高地湖集水域の自然保全に関して多方面からの研究を行った。湖面面積は、ディアタス湖が12.3km²、ディバルー湖が11.2km²、タラン湖が1.2km²であり、湖面高度は上に挙げた順に1,531m, 1,462m, 1,674mである。この3湖の集水域から1km外側にタラン山という活火山(標高2,575m)があるため、この集水域の大部分は火山灰土がおおっている。

この地域はスマトラとしてはかなり高い人口密度を擁しているため、自然林の占める割合はいすでに陸地面積の3分の1以下となっている。陸地面積の優に半分以上は現に耕作されているか放棄された畑地として分類できる。ほとんどの放棄畑は主にワラビを優占種とする荒原の状態にあり、放棄畑の合計面積は現に耕作されている畑の合計面積より、はるかに大きい。畑地でも水田でも、過磷酸石灰他の化学肥料を普通にまいている。

生物指標による水質評価の結果、3湖とも、全体的には貧栄養湖であるとわかった。この結論は透明度や植物プランクトンの現存量から見てもうなずける。しかし、部分的には富栄養化現象も認められた。特にそれは、急傾斜の耕地や荒地に囲まれているディバルー湖で顕著だった。なお、自然林に囲まれているタラン湖ではこのような富栄養化現象はまったく認められなかった。

以上の結果から、表土流亡と溶脱によって富栄養化が進んでいることが示唆されたが、放棄畑表土の化学分析の結果もこの結論を補強するものだった。

この調査湖の富栄養化を防止するには、従って放棄畑の林地化が役立つと思われるが、植生の定量的調査の結果、野火がなくなれば、自然に林地が回復する可能性が十分にあるという結論を得た。

〔第73回研究会要旨〕

フィリピンの宗教について

M. A. FORONDA (デ・ラ・サール大)

This lecture covers the period from the pre-colonial era (pre-1565) to the present. It focuses on trends, movements and characteristics of religions as social movements.

Background: The following are the characteristics of the pre-colonial Philippine religions. 1) Animism: Worship of nature (rock, river, mountain, stars, etc.). 2) Ethical values: concepts of right and wrong as expounded in indigenous laws and as enunciated by the local priests/priestesses. 3) The Filipinos believed in a Supreme Being called *Bathala* (after the Indian *Battara-guru*) as well as minor gods and goddesses. These beliefs and values regulated man-gods/goddesses, and man-fellowmen relationships.

Christianity in the Philippines: Christianity was brought to the Philippines in 1521 by the chaplains of Magellan, but the organized evangelization of the islands began only in 1565. The absence of a unified resistance from the Filipinos facilitated the military conquest and efforts at evangelization. The presence of certain parallel beliefs in precolonial religions and the Christian religion also facilitated evangelization. The pagan *Bathala* became the Christian *Dios* (God), and the pagan gods and goddesses became the Christian guardian angels and patron saints. Certain pagan practices were also accommodated in the new religion and were, thus, Christianized. The union of Church and State fostered the spread of the religion. The whole range of the Spanish period (1565–1898) saw most regions of the islands, except for Moslem Mindanao and the pagan interior mountain regions, converted to Christianity. However, certain precolonial religious practices persisted and gave rise to folk Catholicism and syncretic religious practices. The Catholic Church became the

'cradle' of nationalism, and reared those who were to become the leaders of the emerging Philippine nation in the latter half of the nineteenth century.

The Coming of the Americans and Beyond: The American period (1898 to 1946) was characterized by the following factors. 1) The separation of Church and State and the freedom of religion, which were cornerstones of American colonial rule, gave rise to the introduction of various branches of Protestant Christianity. In 1903 the Philippine Independent Church (PIC) was founded by former Catholic priest Gregorio Aglipay, who broke away from Rome. The PIC membership run into the millions and many of its leaders were elected to high government positions. It began to decline in the late 1920's, however, brought about by cases against it involving ownership of church property. The Iglesia ni Kristo (INK, Church of Christ), another indigenous Church founded in 1910's by a Filipino former Methodist pastor Felix Manalo, is much more disciplined than the PIC. A very homogenous group known for its strict adherence to church leaders, the INK has grown in membership. Politically involved, this church was openly pro-Marcos. The American period and beyond have also seen the establishment of millenarian and messianic cults, like for instance, the Rizalist cults. Members of these cults profess the belief in Jose Rizal, the national hero of the Philippines, as 'the Filipino Christ, true god and true man, the second person of the Blessed Trinity.'

Through the years, the Philippines has remained Catholic. 85% of the country's population profess belief in Catholicism. While many of these believers also profess a kind of folk Catholicism, the Church is as vibrant and as strong as ever—as might be gleaned from its leadership in the People Power revolt which brought about the downfall of Marcos, and propelled Corazon Aquino to the presidency of her country.

〔第74回研究会発表要旨〕

東カリマンタン州の熱帯 多雨林の大火災について

N. WIRAWAN (ハサヌッディン大)

The use of fire to burn segments of forests is not new to the people of Kalimantan who has a tradition of practicing slash and burn agriculture. However, the large forest fire in East Kalimantan which started in October/November 1982 and continue to spread over an area of 3.6 million ha till April/May 1983, not only surprised at the farmers and people of that province but also caught the Government of Indonesia unprepared to cope with it. Until then, no one think or believe that the forest in this moist and wet tropical climate could be burned to such an extent.

In the slash and burned agriculture, it is a common practice for the farmers to cut the vegetation of the area to be used for cultivation during at the end of the relatively dry months period (in Kalimantan from June to August). The biomass is then let to dry and then burned in September or October before planting the crop seeds at the onset of the rainy season which usually starts in October or November. The rain during this season which supports the growth of crop, also automatically checked the spread of the fire. Thus, under normal condition, such a fire rarely escape to become wild fire.

The case was quite different in 1982. The rainfall pattern during that year was abnormal. Furthermore the forest conditions in East Kalimantan (and elsewhere) had also changed, while the mean monthly rainfall in the province is generally above 100 mm, during that year there were only four months having monthly rainfall of more than 50 mm. In addition, the rainy season that is expected to come at the end of the year did not come until April of the

following year (1983). This extended drought period had made the fire, that was set up by the farmers, wild and unmanageable.

The fierceness of the fire was then greatly increased by the availability of many inflammable exposed coal seam as well as the availability of many logs lying on the ground left by the logging companies. In addition, the logging activities which become more intense since the early seventies also created openings of varying sizes which allow dense growth of shrubs. As such, while fire normally does not penetrate far into the primary forest, all these biomass near the ground which become dry during the long drought period, provided extra combustion energy for the wide spread of the fire.

Since logging intensities were quite variable from one site to the other (due to accessibility, availability of floating timber species preferred by the logging companies, etc.) the spread and intensity of fire and the damages made within the 3.6 million ha were also quite variable. Slides presented in this lecture try to show some of these variations.

Although the canopy trees may be dead, the forest in that area may not be necessarily burned or affected by the fire. Ground and aerial surveys indicated some 400,000 ha of forests in this area belong to this category. It includes the mangrove forest, some of the fresh-water swamp, peat-swamp, and dryland dipterocarp forests, as well as the forests on limestone and on sand (heath forest). In general, these unburned forests were not yet logged or logged only lightly. In the remaining area, surviving forest stands may be found at varying sizes. As such, in contrast to the forest fire of the temperate region which generally wipe out the total vegetation, the forest fire in East Kalimantan does left pockets of primary forests of varying sizes scattered in the landscape. While in the badly burned

area forest rehabilitation may be needed, in other or less badly burned areas these pockets of forests may help the recovery of East Kalimantan forests through natural processes.

〔第75回研究会発表要旨〕

オセアニアで流行する感染症

寺師 慎一 (南海研センター)

1982年より南海研主催の文部省特定研究経費「オセアニア海域における水陸総合学術調査」で5ヶ国を、1986年と1987年には文部省海外学術研究(がん特別調査)により、パプア・ニューギニアで医学調査をおこなった。

フィジーでは健康人の末梢血液検査をおこない、ほぼ全員に寄生虫感染による白血球増多がみられた。B型肝炎については、フィジーは感染の危険性を有するウイルス保有者はみられなかったが、ソロモン諸島の病院患者67例中5例がウイルス保有者であった。ミクロネシア連邦(ポナペ、トラック、ヤップの各州)やパラオ共和国等とパプア・ニューギニアでは感冒が最も多く、次に胃腸疾患である。また、トラック諸島では1982年に843例のコレラ患者が発生している。

本来の目的である成人T細胞白血病ウイルス(ATLV)は、日本の南西部とアイヌ、外国ではハイチ出身者に広く分布している。

オセアニア調査ではフィジーとソロモン諸島、トラック州でATLV関連抗体を人血清中に証明出来なかったが、ポナペ州は154例中3例に、ヤップ州で133例中9例、パラオ共和国は176例中19例に抗体陽性者が認められた。ポナペ州の1例はウエノ姓であり、また日本に近い国のほうが頻度の高いことは我が国の影響も否定できない。

パプア・ニューギニアでは1986年に52例(15.5%)、1987年には150例(19.6%)もの高頻度に抗体陽性者を認めた。昨年からはAIDSが目ざされ、この病気の本態の解明と、情報の広まりを原因とする、べつな意味での流行病となった。いまパプア・ニューギニアとパラオ共和国がこの蔓延度に感心を示していると聞く。その他の国でもすでに、その対策がはじまっているかもしれない。ATLVもAIDSも同じ仲間のウイルスであるが、病状も違うし、どちらもウイルス感染が必ずしも発病を意味しないことを付け加えておく。

〔第76回研究会発表要旨〕

シンポジウム「フィリピンの宗教と社会」

1988年2月13日

1) フィリピン=カトリック社会
の歴史的形成をめぐって

池端 雪浦 (東京外大A・A研)

フィリピンは、アジアではめずらしく、カトリック教徒が人口の圧倒的多数を占める国である。それはカトリシズムが、スペイン植民地支配の一環として、この地域にもたらされたことに起因している。この報告では、スペイン体制下でカトリシズムが定着した組織的メカニズムと、教義の受容過程にみられたフィリピン化の問題、そして時代状況とともに変化してゆく民衆の宗教観—とくにキリスト観について考察した。

2) 聖地バナハオ巡礼をめぐって

寺田 勇文 (鹿大南海研)

ルソン島のラグナ州とケソン州の州境に位置するバナハオ山には、Ciudad Mistica de Diosをはじめ、約30の宗教集団がそれぞれ共同生活を営んでいる。これらの宗教集団の多くに共通する祈禱形態の一つに、puwestoと呼ばれるバナハオ山中の社・聖堂(泉、洞窟、大岩、川などの自然物からなる)に対する巡礼がある。この報告では、聖地バナハオ巡礼の内容を検討し、フィリピン文化とくに民衆宗教レベルにおける祈りについて、考えてみた。

3) <二月革命>の基層：カ
トリシズムの視点から

清水 展 (九大教養部)

ベニグノ・アキノ氏の暗殺(1983年8月21日)から「二月革命」(1986年2月22日~25日)に至る政治状況の推移を、ひとつにまとまって解釈されるべき大きな出来事として捉え、制度とし

ての教会、とりわけ一部宗教者達の積極的な政治関与と、一般民衆の心の内なるカトリシズムとが果たした役割について考察を加えた。マルコス体制末期の危機的な状況にあって、物言わぬ民衆、あるいは穏健、中道勢力を政治的に覚醒、結集する際の導きのひとつを、カトリシズムが提供したことを明らかにした。

4) マニラ首都圏のイスラム教徒

宮本 勝 (国立民博)

ミンダナオ・スルー地域から移住したイスラム教徒の居住区が、今日、ルソン島、ビサヤ諸島、ミンドロ島の27カ所に点在する。大規模な居住区はマニラ首都圏に集中しており、そこでのイスラム教徒の人口は10万をこえる。その大半が70年代に戦火を避けるために故郷を離れた「難民」である。彼らの異文化適応の実態、移住の背景に関する最近の調査の報告をすとともに、フィリピンの「ムスリム問題」についても論じてみた。

〔第77回研究会発表要旨〕

フィリピンの地質と鉱物資源

E. G. DOMINGO (フィリピン鉱山地球科学局)

The Philippines is a group of more than 7,000 islands that have been formed in a very active region along the convergence area of three megaplates. The active interaction of these plates has resulted in a complex tectonic history which is reflected in the geologic and structural settings of its various mineral deposits.

The major metallic mineral resources include copper, gold, chromite, nickel and iron. Other metallic resources available are silver, cobalt, manganese, cadmium, platinum, palladium, molybdenum, lead and zinc. Among the non-metallic minerals are

asbestos, barite, diatomaceous earth, feldspar, gypsum, limestone, magnesite, sulfur, silica, talc, marble and rock asphalt. Energy resources include coal, petroleum, geothermal energy and uranium.

These various mineral deposits are briefly described viz their geotectonic setting and distribution, as well as the nature and character of the different types of deposits for each mineral commodity.

〔第78回研究会発表要旨〕

南太平洋のシガテラ

井上 晃男 (南海研センター)

太平洋の南北両回帰線にはさまれた海域の沿岸部、とくにさんご礁域においては、古くから、シガテラ(ciguatera)とよばれる魚貝類による食中毒がしばしば発生することが知られていた。この中毒は、その原因となる魚種を特定できないこと、限られた海域に生息する同一の魚種の間でも毒力が大きく変化すること、一般に幼魚よりも成魚の毒の方が強いことなどから、毒は餌を通じて魚類の体内に貯えられるとする、いわゆる外因説がとられていた。この説に基づいて、海水中に生育する多くのバクテリア、菌類、藻類、動物プランクトンなどが試験された結果、単細胞の鞭毛藻 *G. toxicus* が、この中毒の原因生物であることが確定された。

この鞭毛藻は、長さ約100ミクロンの円盤状の微生物であり、光合成をして、分裂によって繁殖する。25℃でよく生育し、6,000ルクス以上の光では生存できない。ビタミン B₁₂がその成長を促進する。2本の鞭毛をもっていて遊泳する力はあるが、通常は、10 m 以浅の海底の、海藻や死んだサンゴなどに付着して生育し、海水中に浮遊して生活することはほとんどない。実験室内では、条件がよい時には水中に浮遊し、また条件が悪くなると透明な粘質物を細胞の外側に出し、これによって容器壁に付着する。この粘質物は、天然で生育する場合にもしばしば観察され、基物への付着のためばかりではなく、ある時には受光量の調節にも役にたっているようである。

本鞭毛藻は、たとえば筆者が調査しただけでも、タヒチおよびその周辺の島々以外に、ニューカレドニア、フィジー、ソロモン諸島、パプア・

ニューギニアや、パラオ、ヤップ、ポナペなどのマイクロネシアの島々など、いたるところでその分布が確認されており、シガテラ発生の原因となっている。

センター研究会・活動報告

1987年3月から1988年3月までの南海研センターの研究会およびシンポジウムは以下のとおりであった。

◆第65回 (1987年3月23日)

「骨からみた日本人の成り立ち—九州中世時代人を中心にして—」
佐熊 正史氏 (歯)

◆第66回 (1987年4月27日)

「特定研究・オセアニア海域における水陸総合学術調査 (昭和61年度パラオ、ヤップ) に関する研究報告会」

各報告の標題と報告者は以下のとおり(氏名の前の○印は口頭報告者を表わす)。

「パラオ作物生産の現状と問題点」 ○林満氏 (農)

「パラオ・ヤップにおける陸棲哺乳類臼歯のセメント質年輪の形成について」 ○大塚裕之氏 (理)

「パラオにおける海産緑藻類の植生について」 榎本幸人氏 (神戸大・理), ○鯨坂哲朗氏 (京大・農)

「パラオおよびヤップ諸島の魚類におけるTTX誘導体の検索」 ○松居 隆氏 (東大・農)

「パラオ・ヤップにおけるオウムガイおよびその共存生物について」 ○鈴木広志氏 (水産), 早坂祥三氏 (理)

「西太平洋の浮遊性有孔虫」 ○八田明夫氏 (教育), 早坂祥三氏 (理)

「パラオ本島アイライ夾炭層中の化石花粉・孢子」 坂上澄夫氏 (千葉大・理), ○八田明夫氏 (教育), 松本みどり氏 (千葉大・理), 水野嘉宏氏 (千葉大・理)

「パラオ本島アイミリーキ火山砕屑岩中の化石群集について」 坂上澄夫氏 (千葉大・理), ○八田明夫氏 (教育)

「パラオとヤップにおけるシガテラ原因鞭毛藻」 ○井上晃男氏 (南海研), 松居 隆氏

(東大・農), 田中 斉氏 (水産)

「パラオのフィリピン人社会」 ○寺田勇文氏 (南海研)

「Palau, Yap の教育事情」 ○平川忠敏氏 (教養)

「パラオ・ヤップにおける水産開発」

○松田恵明氏 (水産), 草川恒紀氏 (東海大・海洋), 野間卓志氏 (水産), M. タウフィク氏 (水産)

「パラオ語・ヤップ語のアクセント」

○崎村弘文氏 (教養)

「パラオ島, ヤップ島の古地磁気と往復航海における地磁気三成分測定」 ○井口博夫氏 (神戸大・理), 伊勢崎修弘氏 (神戸大・理), 佐柳敬造氏 (神戸大・理), 西 徹氏 (水産), 有馬純宏氏 (水産), 内山正樹氏 (水産), 日高正康氏 (水産), 足立泰久氏 (神戸大・理), 乙藤洋一郎氏 (神戸大・理)

「コロール島とヤップ島の天候の年変化」

○茶園正明氏 (水産), 日高正康氏 (水産), イラワン・M. ミハルジョ氏 (水産)

「マラカル港とトミール港停泊中の日々の天気」 西 徹氏 (水産), 有馬純宏氏 (水産), ○茶園正明氏 (水産)

「1986年11月におけるフィリピン海中央部の海洋構造」 内山正樹氏 (水産), ○イラワン・M. ミハルジョ氏 (水産), 東川勢二氏 (水産), 関岡幹尚氏 (水産), 茶園正明氏 (水産)

「ミクロネシア連邦ヤップ州住民のシャベル型切歯」 ○峰 和治氏 (歯), 佐熊正史氏 (歯), M. B. FIGIR氏, J. T. GAJDUSEK氏, S. GUFSA氏

「パラオ共和国住民における上顎中切歯の捻転について」 ○佐熊正史氏 (歯), 峰 和治氏 (歯), T. ROBERTS氏, M. KUMANGAI氏, A. POLLOI氏

「パラオ共和国における成人T細胞白血病ウイルス関連抗体の疫学調査」 ○寺師慎一氏 (南海研), M. KUMANGAI氏, A. POLLOI氏, S. BORJA氏, J. TECHECHOR氏, F. TERMETEET氏

「ミクロネシア連邦・ヤップ州における成人T細胞白血病ウイルス関連抗体の疫学調査」 ○寺師慎一氏 (南海研), J. T. GAJDUSEK氏, B. TALLEY氏, E. MUMOR氏, A. RACHI氏, G. MANGARIR氏, L. G. DIBAY氏, A. T. LEEMUUT氏

◆第67回 (1987年5月25日)

「アスコルビン酸 (ビタミンC) と血圧について」

吉岡満城氏 (医)

◆第68回 (1987年6月29日)

「ベトナム考古学の現状」

新田栄治氏 (教養)

◆第69回 (1987年8月26日)

「USP の現状と未来」

G. CASTON氏 (南太平洋大)

◆第70回 (1987年9月28日)

「日本・東南アジア関係史再考のための一考察—フィリピン・ベンゲット道路工事 (1900—1905) を事例として—」

早瀬晋三氏 (教養)

◆第71回 (1987年10月13日)

「熱帯地域の動物媒介性寄生虫病—日本と発展途上国とのかかわり—」と題するシンポジウムが本部棟第3会議室で開催された。演題は以下のとおりであったが, 諸発表の後, 総合討論があり, 活発に意見が交換された。

住血吸虫病—水と貝と人間と

野島 尚武氏 (鹿大医学部)

マラリア—熱帯病実地対策と基礎研究との連携

鈴木 守氏 (群馬大医学部)

オンコセルカ症—ロブレス症・奴隷貿易が運んだ疾病

多田 功氏 (熊大医学部)

総括—駆除対策の行方と日本の貢献

田中 寛氏 (東大医科学研)

◆第72回 (1987年11月16日)

「スマトラ高地湖集水域の自然保全」

中野和敬氏 (南海研センター)

◆第73回 (1987年11月27日)

「フィリピンの宗教について」

M. A. フォロンダ氏 (デラサール大)

◆第74回 (1987年12月1日)

「東カリマンタン州の熱帯多雨林の大火災について」

ヌンガ・ウィラワン氏 (ハサヌッディン大)

◆第75回 (1988年1月25日)

「オセアニアで流行する感染症」

寺師慎一氏 (南海研センター)

◆第76回 (1988年2月13日)

「フィリピンの宗教と社会」と題するシンポジウムが本部棟第3会議室で開催された。演題は以下のとおりであったが、諸発表の後、総合討論があり、活発に意見が交換された。

フィリピン=カトリック社会の歴史的形をめぐって

池端 雪浦氏 (東京外大A・A研)

聖地バナハオ巡礼をめぐって

寺田 勇文氏 (南海研センター)

〈二月革命〉の基層: カトリシズムの視点から

清水 展氏 (九大教養部)

マニラ首都圏のイスラム教徒

宮本 勝氏 (国立民博)

◆第77回 (1988年2月29日)

「フィリピンの地質と鉱物資源」

E. G. ドミンゴ氏 (フィリピン鉱山地球科学局)

◆第78回 (1988年3月7日)

「南太平洋のシガテラ」

井上晃男氏 (南海研センター)

南海研センターの出版物

(1987年3月~1988年3月)

◆『南海研紀要』8巻1号

本号には以下の論文が掲載されている。

崎村弘文: 波照間島方言のアクセント体系。

Akira NAGATOMI and Leif LYNEBORG: Redescription of *Irwiniella sauteri* from Taiwan and Ryukyus (Diptera, Therevidae).

Kanetosi KUSIGEMATI: Some Ephialtinae, Banchinae, Porizontinae, Mesochorinae, Metopiinae, and Acaenitinae of Formosa (Hymenoptera: Ichneumonidae).

Kanetosi KUSIGEMATI: Porizontinae and Diplazontinae Collected by the Hokkaido

University Expedition to Nepal Himalaya, 1968 (Hymenoptera: Ichneumonidae).

Seiki YAMANE: A Study of the New Genus *Okinawepipona* in the Ryūkyūs and Taiwan (Hymenoptera, Eumenidae).

Tadao C. KATAYAMA: Morphological Characters of the Cultivated Rice Grains of Madura, Indonesia (I).

Akio INOUE: Distribution of Heavy Metals and Inorganic Nutrients in Nagura Estuary, Ishigaki, Ryukyu Islands.

◆『南海研紀要』8巻2号

本号には以下の論文が掲載されている。

Toshihiro ICHIKAWA, Law Ah THEEM and Kartini BTE MOHAMAD: Particulate Organic Carbon in the Malaysian Coastal Waters of the South China Sea.

Kazutaka NAKANO, Toshiharu WATANABE, Rustam USMAN, and Syahbuddin: A Fundamental Study of Overall Conservation of Terrestrial and Freshwater Ecosystems in a Montane Region of Western Sumatra: Vegetation, Land-use, and Water Quality.

Kanetosi KUSIGEMATI: Anomalinae Collected by the Hokkaido University Expedition to Nepal Himalaya, 1968 (Hymenoptera: Ichneumonidae).

Akira NAGATOMI and Hisako NAGATOMI: The genus *Austroleptis* from South Chile and Patagonia (Diptera, Rhagionidae).

Tadao C. KATAYAMA: On the Wild Rice, *Oryza longistaminata* CHEV. et ROEHR., Collected in Ethiopia.

Vina RAM and Shigero IWAKIRI: Basic Characteristics of Small Island Economies in the South Pacific—A Case Study of Fiji—.

Muhammad TAUFIQ and Yoshiaki MATSUDA: An Economic Analysis of Commercial Fish Landings in the Republic of Palau.

崎村弘文: パラオ語における外来語のアクセント。

笠毛静也, 朝倉哲彦: 南九州地方における VON RECKLINGHAUSEN 病の分布および遺伝についての検討。

◆ Occasional Papers No. 10

Tadao C. KATAYAMA ed. Studies on Ecotypic Differentiations of Wild and Cultivated Rice Species in Africa [Report of Kagoshima University Scientific Survey to Africa in 1984 and in 1985].

本号は南海研センターの兼務教官である農学部片山忠夫教授が研究代表者となって行なったアフリカの栽培種と野生種イネの生態分化の研究を目的とする文部省海外学術調査をまとめたもので、全編9編の報告からなる。この報告集が扱っている国は、マダガスカル、タンザニア、ケニア、ナイジェリア、象牙海岸、リベリア、セネガルの計7か国にわたる。B5版、158頁。

◆ Occasional Papers No. 11

浦島幸世編 古地熱系と活地熱系

本号は本研究センターの主催によるシンポジウム(昭和61年6月16日)の記録で、木村政昭(琉球大学理学部)、中川進(新エネルギー財団地熱本部)、田口幸洋(九州大学生産科学研究所)とJ. W. HEDENQUIST(ニュージーランドの地熱研究センター)、井沢英二(九州大学工学部)と浦島幸世(鹿児島大学教養部)の諸氏による4篇の発表を中心にまとめられている。B5版、96頁。

◆ Occasional Papers No. 12

米盛 亨編 南方漁業の未来像

本号は日本水産学会の後援を受けて本研究センターが主催したシンポジウム(昭和60年10月8日)の記録で、肥後道隆(鹿児島県水産試験場)、鈴木治郎(遠洋水産研究所)、米盛保(遠洋水産研究所)、高林秀雄(九州大学法学部)、松田恵明(鹿児島大学水産学部)、岩切成郎(鹿児島大学水産学部)の6氏の発表を中心にまとめられている。B5版、57頁。

◆ Occasional Papers No. 13

Akio INOUE ed. Fisheries and Marine Resources in the South Pacific.

本号は、本研究センターの文部省特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」の第

3次隊がパプア・ニューギニアのラエにあるパプア・ニューギニア工科大学と共同調査を行なった機会を捕えて1983年11月10日に開催したワークショップにおける発表をもとに、まとめたものである。日本側から3篇、パプア・ニューギニア側からも3篇の報告が掲載されており、上記標題に示されているような事柄に関して基礎から実際の問題まで幅広い内容が盛られている。本研究センターの特定研究の報告書の他に、それに関連してこのような出版もなされたことは意義深いと思われる。B5版、55頁。

◆ Occasional Papers No. 14

Hideo TAGAWA ed. A Research on the Process of Earlier Recovery of Tropical Rain Forest after a Large Scale of Fire in Kalimantan Timur.

本号は南海研センターの兼務教官である教養部田川日出夫教授が研究代表者となって行なった東カリマンタン(ボルネオ島)の森林大火災後の植生回復を主題とした文部省海外学術研究のデータをまとめたものである。なお、この大火災の概要に関しては第74回研究会発表要旨(本号20~21頁掲載)にも記されているので、参照されたい。B5版、印刷中。

◆ The Prompt Report of the Fifth Scientific Survey of the South Pacific.

これは昭和61年度に南方海域研究センターがパラオ(ペラウ)共和国とミクロネシア連邦のヤップで実施した文部省特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」の研究成果速報をまとめたものである。土地利用と陸上生態系の保全、水域の物質生産と資源の有効利用、住民の遺伝と保健衛生、社会及び生活構造、海洋構造とその変動、以上5つの課題のもとに総計28篇の研究報告が掲載されている。この報文集は本研究センターとパラオ共和国の Micronesia Mariculture Demonstration Center 及びヤップ州政府との共同刊行であり、編集の労は中野和敬(編集長、南海研センター)、八田明夫(教育)、寺師慎一(南海研センター)、寺田勇文(南海研センター)、茶園正明(水産)の5氏がとった。

Occasional Papers (南方海域調査研究報告) — 覧

番号	編 者 名	誌 名
1	HAYASAKA, S.	Studies on <i>Nautilus pompilius</i> and Its Associated Fauna from Tañon Strait, The Philippines.
2	IWAKIRI, S.	Ecological Biology and Promotion of Tropical Primary Industry in Indonesia.
3	中 野 和 敬	パプア・ニューギニアの生活と栄養.
4	HAYASAKA, S.	Marine Ecological Studies on the Habitat of <i>Nautilus pompilius</i> in the Environs of Viti Levu, Fiji.
5	TERASHI, S.	Scientific Survey of the South Pacific, 1981 - 1983: Fiji, Solomon Islands and Papua New Guinea.
6	寺 師 慎 一	熱帯と肝臓病.
7	IWAKIRI, S. and RAM, V.	A Selected Bibliography on Fisheries and Related Issues in the South Pacific and Southeast Asia.
8	糸 野 洋	藻類.
9	片 山 忠 夫	南方地域有用農作物遺伝子源の分布と探索.
10	KATAYAMA, T.	Studies on Distribution and Ecotypic Differentiations of Wild and Cultivated Rice Species in Africa.
11	浦 島 幸 世	古地熱系と活地熱系.
12	米 盛 亨	南方漁業の未来像.
13	INOUE, A.	Fisheries and Marine Resources in the South Pacific.
14	TAGAWA, H.	A Research on the Process of Earlier Recovery of Tropical Rain Forest after a Large Scale of Fire in Kalimantan Timur.

The Prompt Reports of the Scientific Survey of the South Pacific

(特定研究成果速報) 一 覧

次	共同出版団体	内 容, 掲載報文数, 発 行 年
1	Institute of Marine Resources, The University of the South Pacific.	昭和 56 年度のフィジー諸島における調査の成果, 31 編 (1984).
2	Institute of Marine Resources, The University of the South Pacific.	昭和 57 年度のフィジーとソロモン諸島における調査成果, 30 編 (1983).
3	The University of Papua New Guinea. The Papua New Guinea University of Technology.	昭和 58 年度のパプア・ニューギニアにおける調査の成果, 18 編 (1984).
4	Community College of Micronesia.	昭和 60 年度のポナペとトラック諸島における調査成果, 21 編 (1986).
5	Micronesian Mariculture Demonstration Center, Republic of Palau. State Government of Yap, The Federated States of Micronesia.	昭和 61 年度のパラオ諸島, ヤップ諸島における調査成果, 28 編 (1987).

以上の他に, 昭和56年度研究経過報告書として本研究センターが1982年に単独で発行した和文報告集「オセアニア海域における水陸総合学術調査 (NAV'81)」がある。その内容は上記の1次報告集と重複しているものが多いものの, 独自のものも含んでおり, 掲載報文数は総計31篇である。

外国人来訪記録

(1987年3月~1988年3月)

- | | |
|--|---|
| ◆ 8月26日
南太平洋大学副学長
G. CASTON氏 | 学東南アジア研究センター客員教授)
M. A. FORONDA Jr. 氏 |
| ◆ 10月13日
ガテマラ衛生局主任研究員
O. OCHOA氏 | ◆ 12月1日
インドネシア, Hasanuddin 大学講師
N. WIRAWAN氏 |
| ◆ 11月27日
フィリピン, De La Salle 大学教授 (京都大 | ◆ 2月29日
フィリピン鉱山地球科学局岩石研究所長
E. G. DOMINGO氏 |

南海研だより No. 18 昭和63年3月18日発行

鹿児島大学南方海域研究センター